

どうする？コスト高騰、豪州の酪農現場から

新型コロナウイルスのパンデミックを契機とした物流の混乱や労働力不足、ロシアのウクライナ侵攻による燃料やコモディティー（原材料）価格の急上昇を背景に、インフレが世界的に加速している。こうした中、農業経営にもコスト高騰の波が押し寄せ、収益を強く圧迫している。オーストラリアの酪農業界も飼料穀物や肥料、ディーゼル燃料の価格、人件費など全てのコストが急騰し、引き下げ要因は見当たらない。こうした高コスト下での業界の現状と今後の見通しについて、オーストラリアの酪農家はどのように感じているのか。現場を訪ねてみた。

「Definitely, Yes(確実にそうです)」。

オーストラリア・ニューサウスウェールズ(NSW)州シドニーから約 200 キロメートル北上したウイリーズ・フラット(Wylies Flat)で、酪農業を営むアンドリュー・ファー(Andrew Farr)氏は今年7月、「投入コストは上昇し、酪農経営に影響を与えているか」という質問にそう答えた。

同氏の説明によれば、1日に1頭当たり3~6キログラム与える穀物飼料の価格は、従来の1トン当たり300豪ドルから420豪ドルと、40%値上りした(2022年2月から7月までの6カ月の為替レートは、1豪ドル=約81~97円で推移)。また、質の良い生乳生産に不可欠という同氏が指摘する高品質な牧草を育てるための肥料コストも、これまでの2倍に上昇した。さらにオーストラリアの農業界全体に広がる人手不足により、

労働コストも1人当たり10万豪ドルの大台に乗ったという。

「こうしたさまざまな投入コストの上昇は、すべてが農場の利益率の引き下げ圧力につながる」と同氏は言う。

同氏は祖父の代から酪農家で、経営する農場の面積はなんと東京ドーム約96個分に相当する約450ヘクタール(採草地を含む)に上る。放牧により乳牛を飼養し、その頭数は時期により約350~500頭で、シーズン終盤の取材時の搾乳量は1日当たり約6000リットルだ。

飼料穀物価格、4割以上の上昇

ビクトリア(VIC)州の複数の酪農家も、「特にロシアのウクライナ侵攻以降、飼料価格の上昇が著しい」と口を揃える。同州やNSW州は2017



「コストの上昇は利益率に影響する」と語るファー氏

年から 2019 年にかけて、年間降水量が例年を 40%も下回る厳しい干ばつが発生、飼料や灌漑水などの価格が急上昇したが、現在のコストの高騰はそれ以上の水準だという。実際にオーストラリアの政府系シンクタンク、農業資源経済・科学局 (ABARES) によると、南オーストラリア州 アデレードの飼料小麦の今年 7 月 15 日の価格は、1 トン当たり約 570 豪ドルで、前年同期の同 390 豪ドルから約 46%上昇した。また、飼料大麦 (VIC 州ジーロング) も、2020/21 年度 (20 年 7 月～21 年 6 月) の同 233 豪ドルから 2021/22 年度には 301 豪ドルへ約 3 割上昇した。さらに今年度 (2022/23 年度) には同 331 豪ドルに到達し、実に 2 年間で 42%値上りするとの予想もある。

また、肥料 (尿素) の価格も中国の禁輸により需給バランスが大きく崩れ、ウクライナ情勢で価格上昇が顕著になり、放牧が主体のオーストラリアの酪農家に大きな影響を与えている。オーストラリアには公的な肥料価格のデータはないが、市場分析会社トーマス・エルダーズ・マーケットツ (TEM) の調査によると、2017 年以降 21 年末まで 300 豪ドル～500 豪ドル (1 トン当たり) で推移していた尿素価格は、今年 1 月に同 1400 豪ドルに跳ね上がった。その後多少の落ち着きを

見せたものの、現在でも例年の 2 倍となる 1000 豪ドル近辺で推移し、ファー氏の言葉を裏付ける状況だ。

過去最高の乳価へ

だが一方で、現在のオーストラリアでは、乳業メーカーが酪農家から生乳を買い取る際の生産者乳価が、過去最高額に達している。これも酪農業界に大きな影響を与えている。

オーストラリアには政府が生産者乳価を管理・監督する仕組みはない。乳価は乳業会社が自社の体力や収益性、マーケティング戦略などを勘案し、さらには乳業会社間の競争も鑑みて独自に決定し、公開が義務化されている。酪農家はその提示価格を検討し納入先を決めるという形だ。

堅調な消費者の需要と、減少傾向にある生乳生産量を背景に、生産者乳価は 2021/22 年度に生乳 1 リットル当たり 0.58 豪ドルを付け、過去最高値に到達した。ABARES は今年度の乳価も同 0.64 豪ドルで 11%上昇すると予想している。このことが酪農家の景況感を下支えしている側面がある。

前述のファー氏も、「生産者乳価は、数年前は 1 リットル当たり 0.4 豪ドル水準だったものが、



単位：豪ドル/リットル

出所：ABARES

現在は満足感のある水準に引き上げられている」と話す。

同氏は乳価の上昇の理由に関し、「オーストラリアの生乳生産量はこれまで 88 億～89 億リットルだったが、今シーズンは 85 億リットルに減少するという予想が出ている」が、「一方で乳製品の国内需要は衰えておらず、輸出も増加する見通し」で、乳処理業界からの強い需要は酪農家に対し好影響を与えると説明する。

同氏は 1 日に 2 回搾乳した生乳を、地場大手メーカーのベガ・チーズ(2021 年にキリンホールディングス傘下の乳業部門ライオン・デリー・アンド・ドリンクスを買収)に納入している。

ファー氏は現在のコストの上昇に関し、「生産者乳価の上昇により売上高が 3 万豪ドル増加しても、その半分は増加したコストに消える」と述べた。だが一方で「コストの割合は次から次へ移り変わるもの」とも強調する。さらに気象庁の長期予報を引き合いに「今後も雨の多い良好な気象条件が見込まれる」とし、土壌の水分量も十分に豊富な牧草が期待できることから、業界の将来性について「前向きだ」と述べた。

ただ、投入コストは依然として上昇し続けていることから、「さらに高い生産者乳価が必要」(VIC 州の酪農家ら)という声もある。

8 割の酪農家、将来に自信あり

酪農業界団体デリー・オーストラリア(DA)が今年 5 月に発表した業界調査「ナショナル・デリー・ファーマー・サーベイ(NDFS)」によると、調査対象とした全国の酪農家 700 人・社のうち、82%が自身の事業の将来に対し自信を持ち、酪農業界の将来についても 68%の酪農家は自信があると回答している。このように、2022 年の酪農家の景況感が高い水準を示した。だがわずか 3 年前の 2019 年の同調査では、自身の事業の将来に自信があるとした酪農家は 45%と半分に達せず、業界の将来について自信があると回答した酪農家は、わずか 34%にすぎなかった。

これまでの推移を見ると、オーストラリアの酪農家の景況感 は 2014 年から 2019 年まで 6 年続落した。落ち込みは 2017 年までは生産者乳価の下落と連動していたが、2018 年と 2019 年は乳価が上昇したにも関わらず、景況感 は下落を続け、過去最低レベルに達した。これについて DA は、当時の生産者乳価の上昇は厳しい干ばつによる生産量の減少が要因で、生産サイドではコストの上昇が大きな問題となったことが、酪農家の将来に対する自信の回復を妨げたと指摘している。



放牧地から搾乳に集まってくる乳牛(NSW州ウイリーズ・フラット)

重要なのは収益性の確保

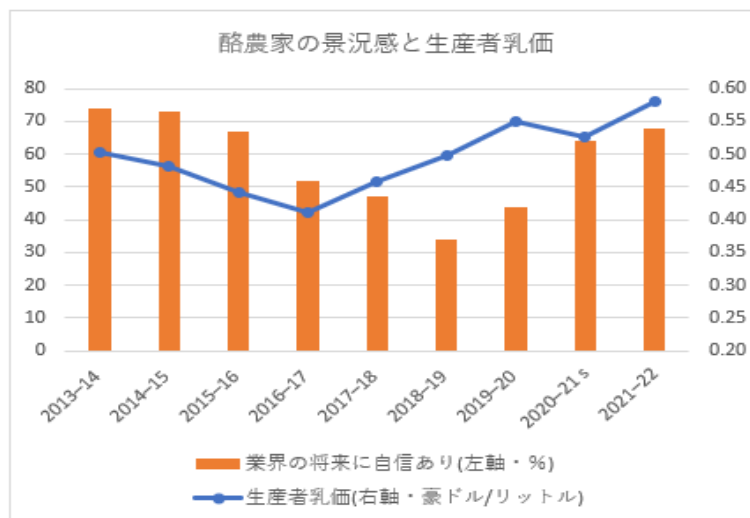
同じコスト高でも酪農家の景況感が高い現在の状況に対し、ちょうど3年前に酪農業から離れた元酪農家が「収益率の違い」を指摘している。

NSW州デンマン(Denman)で宿泊業を営むイアン・シンプソン(Ian Simpson)氏は2019年まで、250頭の乳牛を飼養する酪農家だった。だが「当時、生乳の生産コストが1リットル当たり0.49豪ドルだったのに対し、生産者乳価は同0.5豪ドルにすぎなかった。収益性が異常に低く酪農業を続けることは現実的でなかった」と言う。厳しい干ばつ下での飼料コストは、1トン当たり約400豪ドルで現在とほぼ同様だった。だが大きく異なるのは、低く抑えられた小売価格に圧力を受け、生産者乳価が下落の一途を辿っていたことだ。オーストラリアの小売市場の7割以上のシェアを握る2大スーパーマーケットのウォルワースとコールズは当時、牛乳の販売価格を1リットル当たり1豪ドルに設定していた。酪農家の生産コストを度外視したこうした値付けが、8年間継続したことで、生産者乳価に強い下げ圧力が発生していた。シンプソン氏は「1豪ドルのスーパーの販売価格により、酪農家は小売業

界の安売り競争の『犠牲』になった」。こうした『持続不可能な状況』が続いたのは、当時の酪農業界に競争がなかったことが大きい」と述べた。さらに乳業最大手の協同組合マレー・ゴールバーン(現サポート)などが、シーズン中に突如、一方的に生産者乳価を引き下げたことで、多くの酪農家が損失を計上せざるを得ない状況に陥るなど、業界には力関係の不均衡があったと説明する。

同氏は当時、酪農を継続するか州農業省や業界コンサルタントなどに意見を求めたが前向きな見通しは得られなかったという。農業系銀行ラボバンクは当時、「酪農経営を左右するマージン(利益率)は、飼料を十分に確保できるかが鍵になる」と指摘した上で、「酪農家のマージンはしばらく低水準が続く」と予想し、DAも「酪農家は乳牛を減らすしか選択肢がない」との見方を示していた。

シンプソン氏は、「業界に必要なのは、『酪農家が収益性を確保できる環境』が整っていることだ」と強調。「『プライステーカー(自ら価格設定を行えない市場参加者)』ではなく、『プライスメーカー(価格を自ら設定できる市場参加者)』になることが必要だ」と述べた。





酪農業は収益性確保が何より重要と語るシンプソン氏

コスト圧力は乳処理業界へ

こうした業界の「競争不在」や「不均衡な力関係」の問題が顕在化し、是正されたのはシンプソン氏が酪農業界を去った後だ。

2020年に強制力のある行動規範が酪農業界に導入されたことで、酪農家の権限が強化され乳業企業と対等の関係となった。また、オーストラリアの酪農シーズンは7月にスタートするが、開幕直前の6月に乳業各社は酪農家に対し生産者乳価を開示することも義務化され、供給契約締結に当たり透明性の高い仕組みが整った。

これにより、現在は減少傾向にある生産量を背景に、酪農家に有利な売り手市場が形成されている状況だ。

2022/23年度の生産者乳価は、今年3月に乳業大手ブラ・デアリー・フーズが先陣を切って乳固形分1キログラム当たり7.4~8豪ドルと発表したが、新年度の開幕が近づくにつれ、生乳の確保を目指す乳処理業界の競争が過熱。6月中に各社は提示価格の上方修正を繰り返し、最終的に軒並み同9豪ドルを超える乳価を提示した。中には10豪ドル以上の乳価を提示した乳業企業も出現し、過去最高水準になった。

ラボバンクは、こうした市場環境が「酪農家に潤沢なキャッシュフローを与え、高コスト化でも

十分な利益を確保するための適切な管理を可能にしている」と指摘した。

一方でコスト圧力は乳処理業界に移った形となり、同業界は電気・ガス料金や包装、物流価格の上昇や労働力不足の問題に、生産者乳価の上昇も加わった状態だ。

具体的にベガ・チーズは、今シーズンの開幕までに3回生産者乳価を引き上げ、最終的に当初の提示価格を25%上回る同9.1豪ドルを提示した。そのベガに生乳を供給している前述の酪農家ファー氏は、自身の将来の業況について「Very Confident (非常に自信がある)」と述べている。

参考資料:

- 1) オセアニア農業誌ウェルス
<https://wealth.nna-au.com/category/rakunou/>
- 2) デーリー・オーストラリア
<https://www.dairyaustralia.com.au/industry-statistics/industry-reports/situation-and-outlook-report#.YtyS23bP3ct>
- 3) 豪農業省
<https://www.agriculture.gov.au/abares/re>

[search-topics/agricultural-
outlook/livestock](#)

4) ラボバンク

<https://research.rabobank.com/far/en/sectors/regional-food-agri/australian-dairy-2022-23-outlook.html>

5) Jミルクインテリジェンス

<https://www.j-milk.jp/report/international/index.html#hdg1>

(資料閲覧期間:2022年6月1日～7月25日)

(取材執筆:オーストラリア在住 湖城修一)